

## 科学（者）の中の哲学（者）

### —哲学の生存戦略とそのアジェンダー—

戸田山 和久

#### 1 はじめに、と言うか、ここが一番言いたいこと

本稿は、論文というよりは政治的パンフレットに近いものになる。だから、品のよいものではない。このことをあらかじめお断りしておこう。本来だったら、学会の後の懇親会でくだを巻きながら話すのがふさわしいことがらなのかもしれない。実際、私は酔っばらうと必ずこの手の話をして、周囲の方々を辟易とさせてきた。でも、それにはもう飽きた。ここで、日本の哲学ってちょっとヤバイんじゃないのか？ そろそろ哲学の生き残り戦略をまじめに考えなければならない時期に来ているんじゃないのか？… こういったことをきちんと書いておこう、書いた上で批判を受けようという気になった。

市井の哲人や売れっ子評論家として生きるという限られた選択肢を除けば、学問としての哲学が生き残っていく場所は、まず第一に大学の中ということになるだろう。しかし、その大学では、教養部廃止によって哲学系ポストが減らされた一方で、無定見な大学院重点化によって大学院生数はやたらに増加する、といった恐ろしい事態が刻一刻とカタストロフに近づきつつある。

一方で、哲学に対する他分野からの風当たりはどんどん強くなってきている。情報なんか学部といった「もと教養部」のような組織に属し、自然科学者に囲まれて暮らしている私には、「哲学って何なのよ、われわれにとって意味ないじゃん」という声がしょっちゅう聞こえてくる。哲学の「無用の用」を認めてくれる、旧制高校的教養主義をしかとお持ちの自然科学者もいるにはいる。しかし、こうした方々はほとんどがご高齢だ。つまり、大学における絶滅危惧種なのである。こうしたご老人たちが哲学の大切さを説かれるのを聞くと、ほのぼのと慰められた気にはなるけれど、そうしたリップサービスに当の哲学者じしんが安心したりうっとりしたりしているとしたら、そうとうにお目出度い

と言われても仕方がない。

そこで、同世代、あるいはもっと若い世代の自然科学者からの厳しい声にどう答え、どのように哲学という活動のサバイバルを図るかというのが、私にとって最も切実な問題になる。文学部哲学科という「サンクチュアリ」の中からは想像がつきにくいかもしれないけれど、これは私じしんのサバイバルの問題でもある。「もと教養部」という組織は、改組に改組を重ねる大学において、人材の草刈り場であると同時にゴミ捨て場でもある。数年後、私はどの組織に属しているかまったく見当もつかない。工学部の人々と一緒にいるかもしれないし、理学系研究科の片隅にいることになるかもしれない。しかし、どこにいるにせよ、私は必要とされてそこにいたい(ローンもあるし)。そして、自分が必要とされるということは、同時に哲学が必要とされることであってほしい。

では、どうやって哲学の重要性を訴えていけばよいのだろうか。自分自身にとってもやりがいがあり、ついでに他人様からももうちょっと「尊敬」されるような仕方での延命を図るためには、どんなことが可能だろうか。また、そのための哲学研究者の育成システムはどうあるべきか。こうしたことを検討しはじめべきだ。

というのも、いまなら間に合うのではないかという思いがあるからだ。どんな問題についても、哲学者からは「目から鱗」の、深い、視野の広い話が出てくるはずだという「幻想」は、ありがたいことにかろうじてまだ死に絶えてはいない。かつて、脳研究の最前線で活躍中のある若い物理学者と同席した際に、彼はこう言った。「われわれに必要なのは勇気ある哲学者なんです。」彼の期待は、私を喜ばせると同時に不安にもさせる。果たして、われわれ哲学者集団はこうした期待に応えるだけの実力をもっているのだろうかと自問せざるをえないから。こうした或る意味で過剰な期待に応える形で哲学のサバイバルを図るということは、ようするに次のようなことだ。大学での教員研修のあり方について、脳科学の最前線について、ベンチャー起業の哲学的意味(!)について、ヴァーチャル・リアリティについて、企業の倫理綱領について、… などなどありとあらゆる「雑多」な話題が割り当てられる<sup>1</sup>。その都度「やっぱり、哲学者の話はひと味ちがって面白いね」と言われるような、スルドイ分析、広い

歴史的視野、斬新な発想に基づく話が必ず哲学者側から提供される…。哲学には本来それが可能だと思う。その点で私は哲学という営みに誇りを持っている。しかし、現時点のわれわれに果たしてそれが可能だろうか？

そう問われると自信がない。なぜなら、日本における哲学者育成システムは、ほぼ一貫してこうした能力を奪う方向に働いてきたからだ。日本の哲学教育に最も欠けていたものは、知的「勇気」を育てることだったと思う。私は、自分もシンポジストとして参加したあるシンポジウムを思い出す。司会者から「××とは何だと思えますか？」という課題が与えられ、自分の見解を述べ、討論することになっていた。しかし、私は他のシンポジストの発言に心底がっかりさせられた。彼らは2人ともこう言ったのだ。「私の見解を述べる代わりに、○○がこの問題についてどう言っているかを紹介します。（「○○」のところにはそれぞれ有名な哲学者の名前が入る）」

教育の本質が馴致であり、恐怖心を内在化させて人をコントロールすることであるとしよう。ここにみるのは、見事な教育の成果だ。つまり、「間違っただけを言うことへの恐怖」、それどころか「何ごとかを言い切ることへの恐怖」とすら言ってよいかもしれない。われわれは、たとえばソクラテスの知的勇気を称賛し、哲学者の末裔としてそれを学生に誇らしげに語ったりする。しかしそのわれわれが、何を言っても殺されることはない、はるかに安全なシンポジウムの席で、自分の見解を述べることをこんなにも恐れている。これはちょっと病気ですよ、と私は思う。そして、カンの鋭い人々は、こうした臆病な日本の哲学者に愛想を尽かしはじめている。人工生命と複雑系の分野で活躍中の若手物理学者の研究室を訪れたことがある。新しい分野を開拓しようとするとき、自然科学者も形而上学的・認識論的議論を避けて通ることができない。私とはほぼ同い年の彼は、そうした議論が広い意味で哲学的議論であることを認め、ワイトゲンシュタインやクリプキの仕事にインスパイアされることが多いと語った上で、次のように述べて私を打ちのめした。「あ、でも日本の哲学者には期待してませんから。われわれでやれますから。」

というわけで、いまなら間に合うが、しかし、いまが最後のチャンスなのだと私は考えている。

## 2 科学と哲学の関係を根本的に誤解する1つのやり方

哲学は社会や他の学問分野とさまざまなインターフェイスをもっている。しかし以下では、自然科学（者）と哲学（者）との関係という局面に限定して、哲学の生存戦略を考えることにする。これは誤解のないようにぜひ注意を促しておきたいことがらだ。一つには、私は哲学の生き残り戦略は多面的であるべきだと思っている。さらに、科学と切り離された問いを哲学が現にもっていること、そしてそれは知的興奮に満ちているということをおも私は否定しない。最も評判の悪かったある論文で私はそれを「哲学者のおもちゃ」と呼んだ。これは蔑称ではなく、むしろ賛辞のつもりだったが、自分の大切にしている哲学的問題をバカにされたと感じた人も多かった。科学や現実世界の問題に直接の関わりを持たない哲学的パズルに取り組むことは、哲学という活動の駆動因としてとても重要だし、その問題解決の過程で蓄積される概念、思考実験、哲学的理論は、哲学の工具箱を豊かにし、哲学者がより現実生活に近い問題への発言を求められたときにも役立つ。以上の意味で「哲学者のおもちゃ」は哲学の問題解決能力の向上に不可欠だ。でも、次のことだけは主張しておきたい。

1) 「おもちゃ」はまず楽しむためのものだということ。われわれは哲学の教育の初歩においては、まず第一に哲学的問題に取り組むことのおもしろさを伝えるべく努力すべきだ。哲学の難しさばかりを伝えようとしたり、学部生が未消化になることがわかりきっている素材で授業をして多くの学生を脱落させたことをもって、自分のたずさわる学問の「高級さ」と取り違えるという愚を繰り返すべきではない。

2) 「おもちゃ」に取り組む訓練を通じてしかるべき能力（概念の整理能力、論理的帰結への鋭敏さ、歴史的視点…）を身につけたプロの職能集団として、哲学者が科学や社会にどう貢献できるのかをきちんと考え、アピールすべきだということ。われわれは、あまりに長い間アマチュアリズム（「自分の問題を自分の頭で考える」というのもその変種）と学問的純粋さを取り違えてきたために、外部から「君たち哲学者はプロとしてわれわれにどういう貢献をしてくれるのか」という問いを突きつけられたときに、あわわわ…とあわてふためいて

いるというのが現状ではないだろうか。ようするに、われわれが社会から突きつけられ、解答を求められている問題は次のものだ。「なるほど、哲学は古来からの知的伝統だ、そして哲学的問題を考えることは楽しい。それはわかった。でも、なぜ職業的哲学者が必要なのか？」。

さて、科学と哲学の関係を話を戻そう。哲学と科学のあるべき関係をどう考えるかは哲学の生存戦略におおいに関わりをもつということは言うまでもないだろう。誤った戦略、的はずれな戦略をとるとえらいことになるかもしれない。私は科学実在論者にして自然主義者でありたいと思っている。しかし、とりわけ日本では、この組み合わせは最も反哲学的で、哲学の独自性を失わせ、哲学を自然科学に屈服させ、哲学の存続を危うくする「哲学の敵」であると思われるふしがある。これは、自然主義を批判することによって哲学の独自性が守れるのではないかと考える傾向に現れている。前号に掲載された予稿<sup>(1)</sup>を読みシンポジウムでの発言を聞いた限りでは、野家氏も小林氏もそのように考えているようだ。これは相当におかしい考え方だと思う。そこで、私はまず、自然主義を批判することによって、哲学独自の領域を確保し哲学のサバイバルを図ろうというのは倒錯していること、そしてさらに一步進んで、少なくとも科学とのインターフェイスにおいて、哲学になすべきことを残してくれ、哲学を延命させてくれるほとんど唯一の立場が実は自然主義なのではないかということを目指したい。

自然主義批判と哲学のサバイバルがダブって見えてしまう背景には、科学と哲学の関係についての或る根本的な誤解がある。それは、哲学と科学を対象領域の違いとして捉えようとするところだ。しかし、考えてみてほしい。かりに物理学に還元できない精神、あるいは人間的現象という領域を存在論的に確保することができたとしてみよう。ここで次の2つの疑問が生じないだろうか。

1) その領域を探求する方法として哲学が最適であるという保証はどこにあるのか？ 認知科学の方がよくないか？ 周知のように、認知科学の主流的立場は還元主義をとってはいいない。その意味では、物理学に還元できない心理的法則性という独自の研究領域は現に成立している。しかし、その領域をめぐる2つの対立する研究プログラムとして、認知科学と哲学が張り合っているという話

は聞いたことがない。同様に、生命も物質から創発したことは確かだがそのメカニズムはわからない。おそらく還元的分析的はずれであるだろう。しかし、生命現象が哲学にとっての独自の領域を確保してくれるわけではない。

2) その領域について何を哲学は問おうとするのか。そこに哲学ならではの問題と呼べるものがあるのか？ 小林氏は予稿<sup>(2)</sup>で「心的活動の内実をそもそも原理的に説明しうるものではない」と述べている。しかし、そもそも「心的活動の内実を原理的に説明する」とは何をすることなのだろうか？ この説明における被説明項は何なのだろうか？

われわれは「〇〇を説明する」という言い方にはとりわけ注意すべきだ。この「〇〇」のところに名詞句を代入すると、何やらある特定の課題が与えられたような気がしてしまう。たとえば、「意識を説明する」、「感覚質を説明する」…、だが、「トマトを説明せよ」というのが課題ではなく、むしろナンセンスに近いと同様に、これだけでは何ら課題ではない。このような曖昧な課題に取り組もうとすると、どういうことになるか？ せいぜいが純粹意識をありのままに記述しよう、ということくらいだろうか。あるいはそのさらに退廃した形態として、意識をありのままに記述する複雑怪奇な方法論を砂上の楼閣よろしく築き上げるか、そのまたさらに退廃した形態として、それを築き上げようとした昔の人のテキストをひたすら研究するかということしか残らないのではないか？

3) 私は、哲学は問題解決であるべきだと考える。これは、自然主義が正しかろうが間違っていようが、それには関係なく譲れない一線だ。そうすると、哲学的問題における被説明項は、「なぜ…なのか」「いかにして…なのか」という形をしていなければならない。精神という領域で、こうした形式の問いにどのようなものがあるかを考えてみよう。それは独自の営みとしての哲学の存在を保証してくれるだろうか。たとえば「いかにして奥行き知覚が成立するのか」という問いはどうだろう。しかしこれは、認知科学の方がよく説明できると考えるのが妥当な問いだ。あるいは、「いかにして脳の物理的状態がしかじかのクオリアを生じさせるのか」はどうか。しかし、これこそ自然主義者の問いだったはずだ？

以上の議論に対し、還元主義、自然主義を批判し、物理学に還元できない領

域を確保するために論陣を張る活動じたいは哲学的だという反論があるだろう。これはまったくその通りだ。ただし、そうすると哲学とは、哲学独自の対象領域を確保するための活動なのであり、対象領域が確保された暁にはやるべきこと、解決すべき問いを失うという非常に奇妙なマッチポンプの活動だということになる。誤解しないで欲しいのだが、私は、哲学というものは存在しないとか、哲学を消去すべきだと言っているのではない。ポイントは、哲学を対象領域によって特徴づけることは間違っており、そのように独特の対象領域をもつ活動として哲学を捉えた上で、そのサバイバルを図るとしたら、それは間違った有害な戦略だということに尽きる。

さて、科学と哲学が異なる対象領域をもつ、別種の活動だと考えたい原因をもうひとつあげることにして。それは科学（理論）を文ないし命題の集まりと同一視する、「科学の文モデル」とでもいうべきものだ。文モデルに立つとどうなるか。科学理論をかたちづくる文の中にはたしかに「哲学的文」は含まれない。だから、哲学は科学理論が語っているものとは別のものについて語っているのだと考えることになる。こうして、哲学は科学の外部にあって、科学とは異なる領域について語るか、あるいは、科学の外部から科学について語る（「解釈」したり「基礎づけ」たりする）メタ的な活動だ、という考え方に導かれる。

しかし、この文モデルが科学についての現実離れたモデルであるというのは、もはや科学哲学の常識だろう。クワインのホーリズムにしても、検証の単位を個々の文ではなく、文のネットワーク全体とただけで、文モデルのお化けみたいなものであることには変わらない。でも、哲学者が科学と哲学の関係を考えようとするときには、どうしてもこのモデルが忍び込んでしまう。それは、言語論的転回以降、文の集合としてとらえられた理論には、超越論的主観の代用品としての役割が割り当てられてきたからだ。ホメロスの理論は神々にコミットし、物理学理論は素粒子にコミットしている、ということが、「ホメロスの世界には神がおり、現代物理学の世界には素粒子がある」という言い方に横滑りしていくことによって、理論は世界を限界づけるもの、あるいは世界そのものと等置される。このように理論を世界の限界と考える限り、わ

れわれは、理論とは何か、理論はどのように検証されるか、どのような理論が選択されるべきかといった科学哲学上の諸問題を、世界の中身、つまり特定の世界像にコミットしなくても探求することができるように思われる。こうして、文モデルは、経験科学上の学説の内容がどのように変わろうとも、それだけでは無傷で残る科学の「枠組み」についてのお話として、科学哲学が可能であるかのように思わせてくれる。

小林氏の予稿<sup>(1)</sup>にもこの傾向が現れている。「対象認識をそもそも可能ならしめる超越論的枠組み・条件というものがあり、それは当然経験による改訂の対象とはならないということを指摘することによって主張する。この後者の論点は、科学認識論は、科学の超越論的前提や条件を考察するものであるという主張につながり、このことは認識論を自然科学自体の一章と見なそうというクワインの自然主義を、… はっきり退けるものである。」そして、これこそが、私が斥けたい科学と哲学の関係についてのモデルの典型的なのだ。

### 3 ラディカルに自然化された科学哲学の提案を巡って

私は、科学について文モデルとは別のモデルを提案し、それを「ラディカルに自然化された科学哲学」と呼んだ<sup>2</sup>。それによると、

1) 理論は文の集まりではなく、この世界に何らかの形で物理的に実現されている因果的エージェントである。理論は科学者の観察に影響し、その結果として科学者のその後の行動を通じて世界内の出来事の因果的成りゆきに影響を及ぼす。したがって、理論を模型や計算機や実験器具と並ぶものとして捉えよう。

2) 物理的世界に、いくつもの科学者の脳、実験装置、外的表象としての理論などなどが置かれる。これらの相互作用を通じていかにして科学者たちの脳が互いに同調していくか、外的表象がいかにして物理的世界に同調していくか、またその相互作用を可能にする諸条件は何か、またその同調をより促すにはどのような認識論的規範を設けるべきかの探求が、ラディカルに自然化された科学哲学である。

以上のような科学哲学の自然化プログラムを、私はクワインの全体論→クワ

インの認識論の自然化→チャーチランドの神経科学化された科学哲学、とつないでいって、チャーチランドの科学哲学が科学において外部表象が果たす役割を正当に扱っていないという批判を通じて提示した。しかしこれはまずかったといまでは考えている。第一に、分析・総合の区別を廃棄するホーリズムと認識論の自然化はたしかに相性はよいが、論理的には独立だということに気づかなかった。前者にコミットせず後者にコミットすることはできる。クワインが文モデルを引きずっている限りにおいて、クワインの自然化された認識論は中途半端なものにとどまらざるをえない。自然化の枠組みでは、文のネットワークという抽象的対象をそのまま温存することができないので、それは信念のネットワークということになる。だから、認識論の自然化は心理学の一章であるということにされてしまった。第二に、チャーチランドのトイ・モデルについて長々と語ったために、私が科学哲学を全て脳科学に還元しようと言っていると思われてしまった。そうではなく、自然化された科学哲学は脳科学を含む学際的な分野になると言うべきだった。

ラディカルに自然化された科学哲学の重要なポイントは2つある。

- 1) 一つには、科学の内部と外部という言い方にあまり意味がなくなるということだ。われわれはつい、「科学について哲学が考える」と言いながら、黒板にマルを描き、これが科学、そして、外からそのマルに矢印を描き、哲学はこうして科学を考える、と語ってしまう。こうした素朴なイメージの根底には、科学というものが、境界線でくくることができるような定まった外延をもつ単一の実体であるかのような思いこみがある。このイメージの形成に文の集合として科学を考える文モデルが影響したことは否定できないだろう。しかし、ラディカルに自然化された科学哲学によれば、科学はさまざまな因果的エージェントが織りなす諸作用の網の目として表象される。したがって、どこまでが科学の外延であるかということは、さまざまな因果的出来事の連鎖のうち、どこまでが生命現象か、どこまでが気象現象かを問うことと同じくナンセンスになる。むしろ、科学の境界線は、科学についてどのような目的で何を問うかに応じてそのつど引き直されるものだと考えていた方がよい。
- 2) ラディカルに自然化された科学哲学を遂行するためには、おおよそ世界の様子が分かっているのではなくてはならない。理論が例えば科学者の脳内の何かを

構成要素とすると考えるためには、少なくとも脳の仕組みと働きのおおよそが分かっていることが必要だ。したがって、ラディカルに自然化された科学哲学は、特定の科学理論にコミットした立場だけから遂行可能なものになり、その結果、特定の科学理論と運命をともにすることになる。哲学は特定の経験科学理論の栄枯盛衰とは無関係に、認識や科学の「本質」を明らかにできるものと考えられてきたが、どうやらそうではないということを認めよう、ということだ。

#### 4 職業的哲学者の必要性

以上で素描したラディカルに自然化された科学哲学は、科学者の中での哲学者のサバイバルについてどのような含意をもつだろうか？

1) 科学認識論は科学内の活動である。

科学哲学のラディカルに自然化により、哲学独自の課題と方法を持ち、哲学者だけで営むことができるような、科学に対して構成的な規範を与えることを目的とする科学哲学は消滅する。このことの帰結は、科学哲学者とそれ以外の科学者の境界が曖昧になるということだ。科学者も探求の或る局面で、複数のリサーチ・プログラムの優劣を論じたり、ある結果を発見と言ってよいかどうかを考えたり、これまで使ってきた概念を整理したり、複数の理論の相互関係を考えたりといった、「哲学的・認識論的」な考察や論争を行うことがある。重要なことは、こうした「哲学的」「思弁的」な作業と、実験、観察、シミュレーションの計画を立てる作業、プログラムを組む作業、データを集める作業…は連続しているということだ。それは哲学者の専売特許ではない。認識論はメタ科学ではなく、科学内部の活動と考えるべきだ。

私はこの点をエスノメソドロジーから学んだ。エスノメソドロジーの探究の方法は、「知っている」「発見」「説明」「確実だ」というような認識論的語彙が科学者の日常的な研究活動にどのように組み込まれ、働き、科学者に共通の「科学的事実」を構成することになるのかを微細に記述することにある。「世

界と表象」、「データと理論」、「対象と知覚」というような古典的認識論の二極構造は、科学者の探究のその場で、たとえば「これって発見なんだろうか」、「もっと正確に言ってみてくれ」というような会話を通じて展開されている、いわば「生きられた認識論」を隠蔽（ガーフィンケルの用語で言えば *masking*）してしまう。エスノメソドロジー自体は、「リアリティ」はこうした実践を通じてその場その場で構成されるものだという強烈な観念論的傾向をもっている。私はとても賛同はできないのけれども、認識論は科学に埋め込まれている科学内部の活動だという論点に関してはまったく賛成だ。

## 2) 哲学は遍在する。

したがって、哲学を特徴づけるものは、その対象領域ではない。哲学はすべての知的活動に含まれるある種の活動だと考えるのがよいだろう。それは、自己点検的である、複数のプログラムの関係に関わる、抽象度が高い、概念の整理にかかわる、といった特徴を持つ。哲学はいわばすべての科学に遍在している。このことが哲学に独自の方法がないこと、そして独自の方法をもつ必要もないこと、を説明してくれる。

そもそも哲学には、哲学本来の、哲学独自の方法といったものはない。あると思われているけれども、実はない。あつたとしても非常に貧弱なもの、すなわち内省だけだろう。だしかに、哲学はいわゆる「哲学独自の方法」をいくつも案出してきた。曰く、方法的懐疑による基礎づけ、本質直観、現象学的還元、日常言語分析などなど。しかし、哲学の歴史は同時にこうした「方法」が実はウソだったということが暴露される歴史でもあつた。この事実をわれわれは直視すべきだ。

したがって、科学とのインターフェイスにおいては、哲学者はさまざまな現場の科学者の懐に入って一緒に考える以外の仕方では貢献することはできないと私は考える。ようするに、科学の外部で科学について哲学するのではなく、科学の中で哲学すること、あえて言えば外部的な視点を科学の営みの中に持ち込むことが哲学者のなすべきことだろう。もう少し具体的に述べよう。職業的哲学者が科学の中で何をやるべきか、何ができるかを考えるヒントとして、ティム・ヴァン・ゲルダールの観察を例に取ろう。ヴァン・ゲルダールはその名も「認

知科学における哲学の役割」という論文で、哲学者が認知科学において果たしてきた役割を次のようにまとめている<sup>3</sup>。

### 1 The Pioneer

まだ誰も考えたことのない問いを問い始めることが哲学者の貢献だと言われる。認知科学の場合、これはかなり当たっている。もちろん定義上、そのような問いは個別科学者がすぐに取り組むような問いになっていないから、そのような問いへ仕立て上げるのにはかなりの努力がいるだろう。したがって、未発見の問いを定式化し、それを心理学者、言語学者、コンピュータ学者が取り組める（取り組みたくなる）ような形にもっていくことが哲学者のなしうる一つの貢献だ。たとえば、知覚、行為、概念、表象…などは哲学者たちが最初に論じ始めた。思考の言語という考え方はオッカムらによって中世から論じられてきた。計算主義もまたしかり。

でも、そういう役割を「いま」果たすことができるだろうか？ それはできる、とヴァン・ゲルダーは言う。ヘンペルの説明についての理論を実装して DENDRAL が作られたとか、モジュラリティーという発想をフォードが提案したといったことが挙げられる。

### 2 The building inspector

認知科学の研究プログラムの基本的前提を定式化する。それを吟味する（不整合はないか、曖昧さはないか…）。さらに、必要ならそうした基礎を再構築する。

### 3 The Zen monk

「誰も考えたことのない問いを問う」ということは、必ずしも進歩に結びつくわけではない。こんがらがった議論になっていって現実の認知科学の営みから遊離していくということだって起こりうる。このとき哲学者は禅僧のようになる。科学者が自分では考えるつもりも暇もないが、だれかに考えてもらっておくとよいこと、それを代わりに考える、これが哲学者の役割だ。

認知科学では、狭い内容と広い内容の区別をめぐるごちゃごちゃした問題な

どがこれに当たる。いずれ、この区別が認知科学において重要になるときがくるかもしれない。

#### 4 The Cartographer（地図作成者）

認知科学だって、必ずしも一枚岩ではない。認知科学の様々な構成要素の相互関係を明らかにし、分野全体の見取り図を描くこと。これは哲学者に適した仕事のはずだ。なぜなら、特定のスキルが必要となるわけではないうえに、もともと哲学者はそういうことに興味があるからだ。

#### 5 The Archivist（文書庫の管理者）

蓄積された知識の宝庫からお望みのものを出してくる。過去のアイディア、過去のリサーチプログラム。ドレイファスがこの役割を果たした。

#### 6 The Cheerleader

個別科学者がやっていることの意義や有望さについて論陣を張る。実際、認知科学のそれぞれの流派にはそれぞれこうしたチアリーダーがいる。AI についてのデネット、コネクショニズムについてはチャーチランド。他方、生態学的心理学は不幸にもうまいチアリーダーを見いだすことができなかつたので、認知科学においては優位に立てないでいるというのがヴァン・ゲルダの診断だ。

#### 7 The Gadfly（アブ）

6 とは逆に、うるさがたとして、無視できないほど強力に徹底的に認知科学者を批判する。フォーダーとピリシンによるコネクショニズムへの攻撃がこれに当たる。

なんだ、やることはいっぱいあるじゃないか。そのとおり。ヴァン・ゲルダの論文を読んで、私はたいへんに勇気づけられたことを告白しておこう。こうした役割は、とりわけ分野が立ち上がったばかりの段階の科学、支配的パラダイムがまだ確立していない科学においてこそ果たしうる。こうした分野では、

科学者は研究計画を反省したり、比較したり、基本概念を吟味したりしている。この場合、彼らがそのような作業に適切な出来合いの概念装置をもちあわせているとは限らない。豊富な抽象概念のレパートリーをもち、考え方のパターンとその帰結をかなり先まであらかじめ詰めておくことができるといった哲学者の能力が生かされる点はどこにある。しかも、これが重要なのだが、歴史的偶然によって、哲学者はこうした概念的作業に専念してもよいと制度的に認められている。こうして、科学者の概念の在庫を豊富にする手伝いをする、複数の立場の違いを明確にし、とりうるいくつかの選択肢をあらかじめ用意しておくこと、科学者に有望な戦略を示唆すること、概念的な混乱を解きほぐし整理すること、科学者が過去の実践から何を学ぶことができるかを示すこと、以上が職業的哲学者の役割になる。

これを人工生命のケースで見たい。人工生命研究者とのつきあいの中で、心ある研究者が現在頭を悩ませている問題がわかってきた。そのうちのいくつかを列挙してみよう。

- 1) 人工生命と普遍生物学とはいかなる関係をもつか。
- 2) 人工生命を普遍生物学として正当化するために、生命の多重実現のテーゼで十分か、あるいは強い人工生命の理念が必要か。あるいはどちらも必要ないのか。
- 3) シミュレーションの正確さの度合いを高めていき、実物とそっくりになれば、それは実現 (realization) になる、ということではない。実現とシミュレーションはいわばカテゴリーカルに異なる。では、シミュレーションと実現が程度の違いではないとすると、両者は具体的にはどこが違うのだろうか？
- 4) 実物との照らし合わせがそもそも不可能な計算機実験 (可能だが実現していない「生命」現象、現実にはきわめて長期にわたる自然選択過程のシミュレーション) の良し悪しの基準はそもそも何なのか？
- 5) 物質的なもの (連続的・非記号的・意味をもたないもの) から情報的なもの (離散的・記号的・意味をもつもの) への昇格という創発をどう扱うか。

人工生命がサイエンスとしてきちんとしたものになるためには、それは自前の哲学をもたなくてはならない。人工生命の自前の認識論、形而上学はまだ混沌としている。混乱していると言ってもよい。それを哲学者はサバく、とは言

わないが、いっしょに混乱させて！くらいは言えるだろう。人工生命の研究計画の根底をなす自前の哲学をつくる手伝いをする。哲学者はそこに貢献できる。

## 5 さいごに：ささやかな行動計画

以上のサバイバル戦略には、哲学者がそれにたえるだけのしかるべき能力を身につけていることが必要だ。現在のシステムは、Archivist（しかもひどく中途半端な）の育成にあまりにも偏りすぎている。しかし、大哲学者のテキストを自分なりに要約することが哲学だとされ、「おける」論文が学会誌に氾濫している現状を嘆いているだけでは問題は片づかない。職業的哲学者になるための訓練、彼が身につけるべきプロとしての能力を、哲学のサバイバルという観点から考え直し、哲学者養成教育の新しいプログラムをつくりあげることがわれわれの急務だ。最後にそのためのささやかな提案をして終わろう。

### 1) 「哲学の未解決問題」

哲学者は外部とのつきあいにおいて能力を発揮するためには、「おもちゃ」で十分遊んでおかなければならない。まずは、哲学が問題解決への営みなのだという姿勢を明確にし、哲学者の「おもちゃ」＝未解決問題をリストアップし、問題解決としての哲学の活動を充実させなければならない。

### 2) 哲学史研究とのバランス

伝統的哲学のテキストから学ぶべきことは多い。しかし、それはわれわれが明確な自分の問題をもっていればの話だ。問題（たとえば、知性を機械で実現できるか、できるとすればどうすればよいか）をもつ限りにおいて、はじめて、デカルト、カント、ハイデガー、ウィトゲンシュタイン、メルロ＝ポンティたちから何ごとかを学ぶことができる。したがって、カントならカントの中に「問題」を求め、そしてさらには答えまでも求めようとする、つまりカントの中でだけ哲学をしようすることは、結局はカントから何も学ぶことができない。こうした態度の哲学研究者が日本には溢れている。

### 3) 異分野とのコミュニケーション能力を育てるために

万学の天才が生じたデカルトやライブニッツの時代ならいざしらず、現代では一人でこんなにいろいろできないよ、という声が聞こえてくる。それならば、哲学は個人的な営みだというアマチュアリズム的な先入見を捨て、他の哲学者たち、あるいは他分野の研究者たちとのコラボレーションを行うために必要なコミュニケーション能力を磨くべきだ。たとえば、哲学者は、物理学でも数学でも、何でもよいから「副専攻」をもつべきだ。そうしなければ、他分野の人々の話についていくことはできない。少なくとも、的はずれでない質問ができる程度には他分野についての知識をもつ必要がある。この副専攻は哲学者養成のための教育に制度的に組み込まれる必要があるだろう。

## 註

<sup>1</sup> ここに挙げた項目は、ここ数年の間に実際に私が引き受けて何ごとかを話すはめになった講演のタイトルだ。とは言うものの、どの課題もうまくこなせたということはまったくない。むしろ、「二度とこういう話を引き受けるのはやめよう」と決意する情けない結果になったことの方が多い。

<sup>2</sup> 「科学哲学のラディカルな自然化」日本科学哲学会編『科学哲学』、32-1、1999、pp. 29-43、「自然主義的転回の果てに科学哲学に何が残るか」岡田猛、三輪和久、田村均、戸田山和久編『科学を考える：人工知能からカルチュラル・スタディーズまで 14 の視点』北大路書房、1999、pp. 310-337

<sup>3</sup> Tim van Gelder, Roles of Philosophy in Cognitive Science, *Philosophical Psychology*, 11, 1998, pp.117-36

## 編者註

- (1) 『哲学の探求』第28号 p. 162-163、「科学と哲学—自然主義の射程と限界—」参照。
- (2) 上記小林氏の講演要旨参照。
- (3) 上記小林氏の講演要旨参照。

(とだやま かずひさ／名古屋大学情報文化学部)